

産学連携学会メールニュース
J-SIP Mail
発行：産学連携学会（編集 WG）
第 1478 号 <2025.8.19>

[[[ヘッドライン]]]

【産学連携学会 第 23 回大会（函館大会）6 月 19 日、20 日】

オーガナイズドセッションに関するご報告③

セッション名：大学におけるクラウドファンディングの実践および展望

開催日時：令和 7 年 6 月 20 日（金）9：00～10:30

会 場：A 会場

1. 概要

SDGs や地域活性化など社会課題に対する大学を中心としたプロジェクトへの社会的期待は高い。これらに対する取り組みの受益者は、地域や世界といった漠然としたコミュニティーであり、特定の受益者が活動経費を負担するというスキームの中で継続することは困難である。また、我が国では現在、科学技術関係の予算の過度な「選択と集中」、運営費交付金や私学助成金などの「基盤経費の減少」より、研究者の知的好奇心による基礎的な研究が行いづらい状況にある。

このような状況下、多様な教育・研究活動の推進の財源確保方法として注目されているのがクラウド・ファンディングである。本セッションでは、大学等におけるクラウド・ファンディングの実践において注意すべき点、アントレプレナーシップ教育での活用など産学連携活動へのインパクトに関する報告の後にセッションタイトルによるパネルディスカッションを行った。

オーガナイザー

原田隆（東京科学大学 主任 URA）

話題提供者

柴藤 亮介（アカデミスト株式会社 代表取締役 CEO）

杉岡 秀紀（福知山公立大学 准教授）

2. オーガナイザーによるセッションまとめ

大学がクラウドファンディングに取り組む一義的な意義は、学生、研究者、研究支援者、そして大学組織の「アントレプレナーシップ」の涵養への貢献である。

アントレプレナーシップは「起業家精神」と訳されることが多いが、EUによる「機会やアイデアに基づいて行動し、他人のために経済的、文化的、社会的価値に変換する能力」(EntreComp: The entrepreneurship competence framework)という定義がしめすように社会のすべてのステークホルダーが習得するできであり、それは大学などの組織にも拡大していくべきであろう。

セッションは、はじめにオーガナイザーより、文部科学省の調査から令和5年度における我が国の外部資金に占める寄附およびクラウドファンディングの占める割合、クラウドファンディングによる資金獲得額が多い大学の特徴などについて説明があった。

話題提供パートでは、学術系クラウドファンディングのパイオニアであるアカデミストの柴藤亮介氏より“Open Academia”というキーコンセプト、クラウドファンディングによる萌芽期の研究の支援から公的資金や民間資金の獲得、事業化までの支援事例紹介の後、(1)学術系クラウドファンディングの本質は研究費獲得ではなく仲間集めであり起業マインドの獲得や産学協働の起点をつくる場としても機能していること、(2)産学連携の成功には産学協働が不可欠であり、そのためには研究者と企業それぞれのVisionを交える場が必要であるというメッセージが参加者に発信された。

産学連携による人材育成に取り組んでいる福知山公立大学の杉岡秀紀氏から起業家育成プログラムのカリキュラムの一環としてクラウドファンディングを組み込んだ同大学の「NEXT 産業創造プログラム」の事例報告が行われた。杉岡氏はまず「クラウドファンディングの要諦は、資金獲得だけでなく、テストマーケティングにある。そして、大学のプログラムとして成功させるためには大学の専門性だけでは足らざる面がある。ということ認識しておくことが重要である」と強調した。そして成功させるためのポイントは、

- (1) クラファンの専門家や外部機関との協働、
- (2) 起業を目指す社会人と大学生のコラボレーション、
- (3) プログラム終了後についても外部機関と連携し、さらなるビジネスプランのブラッシュアップを図る、の3点にあると述べた。

パネルディスカッション「クラウドファンディングをいかに支援していくのか」では、(1) 研究者へのアプローチ、(2) 学内関係部署との調整、(3) 新たなファン、顧客の獲得、(4) ステークホルダーへの正しい説明と持続的な関係の構築、(5) 外部のプラットフォームとの連携をテーマにフロアも交えてディスカッションを行った。

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、産学連携に関する情報をお流しいたします。会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、産学連携学会事務局 (j-sangaku@j-sip.org) までご連絡ください。